

祇管打坐

山口等澍

一一一

坐禪は唯だ是れ安樂の法門であり、菩提を究盡するの修證である。これ正法の行持である。一見明星下、有情非情同時成道せる正法眼藏涅槃妙心の端的であり、九年面壁終日默坐の眞面目である。これ大安樂の妙法術である。是の故に、眼藏行持の卷には、「おほよそ初祖二祖、かつて精籃を草創せず、薙艸の繁務なし、および三祖四祖もまたかくの如し。石頭大師は、艸菴を大石にむすびて石上に坐禪す。晝夜ねぶらず、坐せざるときなし、云々」とある。これ坐禪を行することが佛法の眼目であり、祇管打坐、ひたすら坐禪を行じぬくことが、何よりも先きだつべき佛正法の根本行持たるべきことの佛祖の蹤跡である。が安樂といふことは、ここでは決して單にらくといふことではなくして解脱である。解脱脱落であるからまた苦心辨道だ。

扱て坐禪に關してこゝにその本質的概説を做すことは省く。そして行亦禪坐亦禪といふこと、即ち、坐相、執坐の問題に就て少しく記す。

「驀然として盡界を超越して佛祖の屋裏に大尊貴生なるは、結跏趺坐なり。外道魔黨の頂額を踏翻して佛祖の堂奥に

箇中人なることは、結跏趺坐なり。佛祖の極之極を超越するは、ただこの一法なり。このゆゑに佛祖これをいと名みて、さらに餘務あらず。」とは三昧王三昧の卷頭に光る大文字であるが、この道破は並大抵の凡事の能く解するところではない。僧が無暗にこんな獅子句を書きついでいゝ氣持になつてゐたらまさにばちが當るのである。これ洞門古風に準じて禮拜に値するものである。盡虚空界の徹見大悟、佛法究盡の道破であり、識見であり、自證である。古今東西のあらゆる思想を調伏する力と自信のある者でなければ道へないところである。坐禪が何故にたうといか、この邊からも推して知るべきである。

ところで、吾々が今現實の問題として、何もしないで唯だ達磨の眞似をして坐つてをればそれでよいか。そんな事が出来るか。佛祖の教説も金句も眉に唾して生かしてとらぬと自分が地獄へ落ちるはもとより、佛祖を地獄へ落すやうなことになる。文字表現の本質に徹しなければならぬ。淺い字義の自解に止まつてその眞理の本來の面目を失したならば、ばちがあたるのである。さう思ふと中々筆など採れない。が縮んで了つたら佛祖の大道また通達を失ひ、佛祖の命脈は斷絶するのである。執筆苦心、把銃突入、治生産業、國家報公、これまた坐禪の行に外ならぬであらうか。

一體、普勸坐禪儀にも超凡越聖坐脫立亡とあり、また豈に坐臥に拘らんやとあり、眼藏坐禪儀にも坐臥を脱落すべしとある。然も、「おほよそ西天東地に佛法つたはる(ゝ)といふは、かならず坐佛のつたはる(ゝ)なり。それ要機なるによりてなり。佛法つたはれざるには、坐禪つたはれず。嫡嫡相承せるは、この坐禪の宗旨のみなり。」(坐禪箴の卷)であり、坐禪は佛法の正門(辨道話の卷)であり、「結跏趺坐、これ三昧王三昧なり。これ證入なり。一切の三昧は、この王三昧の眷屬なり。」(三昧王三昧の卷)である。而してこの二つの對立矛盾するが如くに一見思はれる問題は、實に

坐禪の當相が佛法の本質的眞理として、身心脱落、脱落身心をその端的とするといふ意味に依て、對立でも矛盾でもないことが解せられるのである。普勸坐禪儀に身心自然に脱落して本來の面目現前せんとはこれである。脱落の一著も脱落されなければならぬ端的機用機要に於て脱落脱落である。脱落は真空無染汚の全機現であり、脱落脱落は妙有諸法への現實的活動的なる全機現である。本來脱落はその一機用に於てこの二機用を具へてゐるのである。兩手で音が一つ鳴る様なものだ。

坐禪に關する斯くの如き問題は、決して狹義に於ける一宗一派の専門的なる特殊的考察とみらるべきではなくして、それは、坐禪の本來の意味に於て、全佛法の根本的眞理として、人間及び世界の盡時的盡虛空的な根本的眞理の本質的なる一例證的特殊的考察とみられなければならぬ。故に斯くの如き問題の考察は坐禪の何物であるかといふ本質的意味の上に基礎づけられなければならぬものである。さういふふうに取り扱つて、始めて、斯くの如き問題がまた坐禪の根本的本質的なる意味を更に究明し得るものとなるのである。故に斯くの如き問題は、坐禪が何物であるかといふやうなことに無關心であるものにとつては全く無意味である。

佛佛祖祖家風、坐禪辨道也、先師天童曰、坐趺、乃古佛法也、參禪者、身心脱落也、不_レ要_二燒香禮拜、念佛、修懺、看經、祇管打坐始得、この天童如淨禪師の語を引いて道元が坐禪そのものを參禪辨道の根本的中心的な行の典型とするのは、例へば永平廣錄第六卷に、第九卷に、また正法眼藏の辨道話の卷に、三昧王三昧の卷に、佛經の卷に、繰返し親切に説いてをり、瑩山また坐禪用心記に説いてゐるところである。祇管は只管と書いても全く同一である。ひたすらである。打坐の打は坐の意味を強める、(支那語)坐になりきること、行として坐禪に專念すること、深入禪定の意味である。參禪は身心脱落である。それ故に燒香とか、禮拜とか、念佛とか、修懺とか、看經など一切不要である。ひ

たすら坐につとめて辨道せよといふのである。心意識の運轉を停め念想觀の測量を止めて作佛といふことをさへも圖つてはならぬ。唯だ（結）跏趺坐の正身端坐に兀兀として坐定して、思量箇不思量底を端的とせよ。「誠に夫れ、佛祖單傳の旨、言外領略の宗は、先哲公案の處、古德證入の處に在らず、語句論量の處、問答往來の處に在らず、知見解會の處、思量念度の處に在らず、談玄談妙の處、説心説性の處に在らず」（永平廣錄第八卷）である。所以に須く言を尋ね語を逐ふの解行を休止し、須く回光返照の退歩を學して、身心自然に脱落して本來の面目現前するを得よ。誠に是の坐禪の當相は、聲色の外の威儀たるべく、知見の前の軌則である。修證にさへも染汚されざる眞空無染汚の圓通の大道であると言ふのである。それ故に打坐の當體の端的は、佛法眞理如實の理想を身心的形態に典型的に具體的に表象徴したるものである。それは、佛法の端的の最も純粹なる根本的基礎的形式的全體的なる超越的基本的具現である。従つてそれは決して單に身體的な一つの姿態キズに止まるとさるべきものではない。身心一如として、理想的典型的なる表象徴として、斯くの如き正身端坐を以て眞理を基本的に身心に即せしめたのである。故にそれは決してぼかんとぼんやりしてゐることではない。活動の基礎としての、活動の極としての、根本靜であり、言語の基本としての、言語の極としての、根本默であり、自覺的本覺的行の基礎としての、かくの如き行の極致的超越としての根本形式行である。

故にこの坐禪は佛法の根本であり、形式的基礎であり、全體的基本であり、最純粹なる行形態であり、超越的なる典型である。従つて一切の現實的内容的なる諸活動の展開は、こゝにその根本と基力とを有するのである。これ佛道の根本なるが故にこれを基とせずしては、佛道も佛行も始まらないのである。これを眞に了解し、心に銘じ、膽に銘じ、骨髓に銘じ、身に泌みて體驗體得することが悟であり、證である。この大悟は生死透過、死の克服解脱である。

それは死によつても崩されざるものである。これ一切の現實的諸活動を生かし、それに徹底的なる意義と價值とを與へ、死に意義を與へ、如何に死すべきかに意義を與へ、如何に生くべきかに意氣と方向とを與へるものである。故に釋迦は、これを基として四十九年世に行道說法して是の中に涅槃を示し、震旦初祖二祖を始め佛祖何れも坐禪に先づ精進辨道し、日本禪の開祖道元また只管打坐を以て佛道の根本行となすのである。

が日本禪の本質が那邊に存するかを知らねばならぬ。佛法・禪は直指單傳、嫡嫡承嗣であるが、日本禪、承陽禪は正法禪として決して單に釋迦、達磨、如淨の承け嗣ぎに過ぎずと言はれ得べきものではないことを知らねばならぬ。如何にそれが日本人の中に、日本精神に依つて生かされ、如何にして日本人のものとなり、而してそのことが、如何に佛道の本質から佛道の本質を破ることなく佛道の本質を生かすやうに行はれたかを知らねばならぬ。道元禪の偉大さは蓋し此處にあると言はねばならぬ。日本精神が禪の中に生きて了つたのである。日本精神が禪を佛道を日本精神的に生かし、日本精神と佛道・禪とが一つに同化して了つたのである。それを遂げて、その大悟に、その現實的行持に、それを徹せしめしところに日本禪の開祖としての承陽大師の偉大さが存するのである。それは更に機會を改めて詳説究明さるべき大問題である。が解つてゐる者にとつては今更説くにも及ばざることである。

眞空無染汚の端的を根本眞理とする坐禪・佛教は、絶對的超越的なる根本的な意味の端的なる觀、悟、證を本質とし機要とするか故に、言語文字を徒に追尋して表面的淺薄なる固著を裂破し、それを生ける本質的意味に於て活用せしめんがために、道元に於ても屢々覆倒を説き、關捩を用ひ、全機現を説いてゐる。これ人間の表現象徴作用に關するものでもあるが、また、眞空無染汚の坐禪の端的が決して單なる固着的平易の動きのとれぬ死物でなくして現實的活動や言語や理論の極致としてのものであるがためである。上述せるが如く、參禪は身心脫落が眼睛であつて、燒香、

禮拜、念佛、修懺、看經を用せず、祇管打坐にして初めて得と述べ、然も「しかはあれども、讀經念佛は、おのづから、さとの因縁となりぬべし、ただむなく坐してなすところなからん、なにによりてかさとりをうるたよりとならん。」(辨道話の卷)と言ひ、看經の卷には、さういふ消極的な見方ではなくして、一步進んで、坐禪は思量箇不思量底であり、不思量底を思量するといふことは非思量といふことであるといふ如きことが決して、ぽかんとむなく坐すべきことを言ふのでないのみならず、坐禪の端的たる非思量は大思量であり大不思議であつて、この非思量といふことなどが決して淺義のものでないことを説いてゐる。禮拜得髓と言ひ、供養諸佛と言ひ、前佛懺悔の功德力と言ひ念經、看經、誦經、書經、受經、持經、ともに佛祖の修證なりと迄説いてゐる。そして坐禪の眞理がこゝまで了解體得されし時、始めて哲學的に宗教的に完うされると言ひ得るのである。そこに哲學と宗教との佛教的なる融合が存する。そこに自力と他力との圓融が存する。禮拜や、念佛や、懺悔や、經卷や、知識やを無視しては、眞に佛法の總府としての正法眼藏佛心印の坐禪ではないのである。そこで詳には禮拜と坐禪、念佛と坐禪、懺悔と坐禪、經や知識と坐禪の關係を一々説明すべきであるが、今は經、知識の一つに沿つて道元の所説が坐禪と如何に關係せしめられてゐるかを考察する。その他のものに關しては他日改めて述べようと思ふ。然も經や知識と坐禪の關係は他のものゝ坐禪との關係に類同するところ少くないのである。

正法眼藏看經の卷は佛經の卷と共に經や知識の何物であるかを知るに大切であるが、先づ看經の卷を見ると斯うある。「阿耨多羅三藐三菩提の修證、あるひは知識をもちぬ、あるひは經卷をもちぬる。知識といふは全自己の佛祖なり、經卷といふは全自己の經卷なり。全佛祖の自己、全經卷の自己なるがゆゑに、かくのごとくなり。自己と稱すといへども我爾の拘牽にあらず、これ活眼睛なり、活拳頭なり。しかあれども念經、看經、誦經、書經、受經、持經あり、

ともに佛祖の修證なり。しかあるに佛經にあふことたやすきにあらず、於無量國中、乃至名字不可得聞なり、於佛祖中、乃至名字不可得聞なり。於命脈中、乃至名字不可得聞なり。佛祖にあらざれば、經卷を見聞、讀誦、解義せず、佛祖參學よりかつかつ經卷を參學するなり。このとき耳處、眼處、舌處、鼻處、身心塵處、到處、聞處、話處の聞、持、受、說經等の現成あり。爲求名聞故說外道論議の輩、佛經を修行すべからず。そのゆゑは、經卷は若樹若石の傳持あり、若田若里の流布あり、塵刹の演出あり、虚空の開講あり。」と。無上正等覺の修證、或ひは知識を用ゐ、或ひは經卷を用ゐる。坐禪は無上正等覺を究盡するの修證である。知識といふは全自己の佛祖なり、經卷といふは全自己の經卷である。而してそれは、自他の二見を脱落裂破せる無上正等覺としての眞の自己は、全佛祖の自己、全經卷の自己なるが故であるといふのである。即ち自己と稱すと雖も、この自己は、我汝といふが如き二見對立の意味に於ける我ではなく、かゝる獨斷的偏執の小我ではなく、自、他、從つて彼をも統一、脱落、裂破、圓融せる最も根本的基礎的絶對的超越的統一的なる、その究盡としての無上正等覺、眞空無染汚の機要に於て言へるものであつて、決して淺薄わかりきつたことをこねくつてゐるやうな論理で、これは論點竊取だとか循環論法だなどと言つて詭辯者流の論理などのつつき得るところでなく、そんなへりくつに毛のはえたやうな論理の近寄ることも出來ぬ精神的體驗的な無上眞理の根本的な本質直觀の活眼睛としての自己だと言ふのである。それは、不惜身命の眞摯慕直なる發心修行、勤精進努力に依つて始めて得らるゝ無上正等覺、眞空無染汚の體驗體得歸納創造の大悟の論理であり、戲論、醜惡の論理でなく、生死の克服解脱の最も眞摯なる哲學的且つ宗教的な生の本質的な論理であるが故に、時空を貫いて然も現實的一切の活動力の基礎たり得る活眼睛であり、活拳頭であると言ふのである。これ坐禪の根本眞理に外ならぬ。それであるから *Sūtra* とか經といふ其の無上眞理を記したものが誠にたうといふ功德を有するものとなる。そこ

で念經、看經、誦經、書經、受經、持經、ともに佛祖の修證であると迄言ひ得るのである。佛經に遭ふことは容易のものではない。佛經の眞理を了解得せば既に佛、大覺者である。佛經の名を聞くさへ難値難遇である。佛祖にあらざれば經卷を見聞誦解義せず。修證は一如である。佛祖こそ參學し、種々經卷に學ぶのである。扱て經とは何であるか。道元は虚空の開講ありとも言ふ。その究竟に於て經なるものゝ本質を突きつめて、この無上正等覺、眞空無染汚の佛法の根本、坐禪の大眞理を記す書き物はもとよりであるが、この眞理を表すものは、また表はすものと見られたるものは、皆經であり、谿聲山色までも、盡十方界、みな看るべき眼を以て看れば經であると迄道破するのである。一息半歩、しかしながら、念經、看經ならざるなく、出息入息、行住坐臥、何れも如是經を常に轉じ常に行ずるものたり得ると迄道破するのである。そこで佛經の卷を更に披かう。「この（經）なかに教菩薩法あり、教諸佛法あり、おなじくこれ大道の調度なり。調度ぬにしたがふ、ぬし調度をつかふ。これによりて西天東地の佛祖、かならず、或從知識、或從經卷の正當恁麼時、おのおの、發意、修行、證果、かつて間隙あらざるものなり。發意も經卷知識により、修行も經卷知識による。證果も經卷知識の一親なり。機先句後おなじく經卷知識に同參なり。機中句裏おなじく經卷知識に同參なり。知識はかならず經卷を通利す。通利すといふは、經卷を國土とし、經卷を身心とす。經卷を爲他の施設とせり、經卷を坐臥經行とせり。經卷を父母とし、經卷を兒孫とせり。經卷を行解とせるがゆゑに、これ知識の經卷を參究せるなり。知識の洗面喫茶、これ古經なり。經卷の知識を出生するといふは、黃檗の六十拄杖、よく兒孫を生長せしめ、黃梅の打三杖、よく傳衣付法せしむるのみにあらず、桃華をみて悟道し、竹響をききて悟道する、および見明星悟道、みなこれ經卷の知識を生長せしむるなり。あるひはまなこをえて經卷をうる皮袋拳頭あり、あるひは經卷をえてまなこをうる木杓漆桶あり。いはゆる經卷は、盡十方界これなり。經卷にあらざる時處な

し。勝義諦の文字をもちゐ、世俗諦の文字をもちゐ、あるひは天上の文字をもちゐ、あるひは人間の文字をもちゐ、あるひは畜生道の文字をもちゐ、あるひは修羅道の文字をもちゐ、あるひは百草の文字をもちゐ、あるひは萬木の文字をもちゐる。このゆゑに、盡十方界に森森として羅列せる長、短、方、圓、青、黃、赤、白、しかしながら經卷の文字なり、經卷の表面なり。これを大道の調度とし、佛家の經卷とせり。この經卷、よく蓋時に流布し、蓋國に流通す。教人の門をひらきて、盡地の人家をすてず、教物の門をひらきて、盡地の物類をすくふ。教諸佛し、教菩薩するに、盡地盡界なるなり。開方便し、開住位門して、一箇半箇をすてず、示眞實相するなり。この正恁麼時、あるひは諸佛あるひは菩薩の慮知念覺と無慮知念覺と、みづからおのおの強爲にあらざれども、この經卷をうるを各面の大期とせり。必得是經のときは、古今にあらず、古今は得經の時節なるがゆゑに、盡十方界の目前に現前せるは、これ得是經なり。この經を讀誦通利するに、佛智、自然智、無師智、ころよりさきに現成し、身よりさきに現成す。このとき新條の特地とあやしむことなし。この經のわれらに受持讀誦せらるるは、經のわれらを攝取するなり。文先句外、向下節上の消息、すみやかに散華貫華なり。この經をすなはち法となづく。これに八萬四千の說法蘊あり。この經のなかに成等正覺の諸佛なる文字あり。現住世間の諸佛なる文字あり。入般涅槃の諸佛なる文字あり。如來如去、ともに經中の文字なり。法上の法文なり。拈華瞬目、微笑破顏、すなはち七佛正傳の古經なり。腰雪斷臂、禮拜得髓、まさしく師資相承の古經なり。つひにすなはち傳法付衣する、これすなはち廣文全卷を付屬せしむる時節至なり。みたび臼をうち、みたび箕の米をひる、經の經を出手せしめ、經の經に正嗣するなり。しかのみにあらずは何物恁麼來、これ教諸佛の千經なり、教菩薩の萬經なり。説似一物即不中、よく八萬蘊をとき、十二部をとく。いはんや拳頭脚趺、柱杖拂子、すなはち古經新經なり。有經空經なり。在衆辨道、功夫坐禪、もとより頭正也佛經なり、尾

正也佛經なり。菩提葉に經し、虚空面に經す。おほよそ佛祖の一動兩靜、あはせて把定放行、おのれづから佛經の卷舒なり、窮極あらざるを窮極の標準と參學するゆゑに。鼻孔より受經出經す、脚尖よりも受經出經す。父母未生前にも受經出經あり、威音王以前にも受經出經あり。山河大地をもて、經をうけ經をとく。日月星辰をもて、經をうけ經をとく。あるひは、空劫以前の自己をして、經を持し經をさづく。あるひは、面目以前の身心をもて、經を持し經をさづく。かくのごとくの經は、微塵を破して出現せしむ、法界を破していだしむるなり。第二十七祖、般若多羅尊者道、貧道、出息不_レ隨_ニ衆緣_一、入息不_レ居_ニ蘊界_一常轉_ニ如是經_一百千萬億卷、非_ニ但一卷兩卷_一、かくの如くの祖師道を開取して、出息入息のところに轉經せらるゝことを參學すべし。轉經をしるがときは、在經のところをしるべきなり。能轉所轉、轉經轉なるがゆゑに、悉知悉見なるべきなり。」と。誠に感歎禁する能はざる道破。正に禮拜するに足る大經中の大經。これだけの所述を以てしても、道元の識見が現代の西洋的哲學の最高峰を睥睨するに足るものであることを何人が疑ひ得よう。そこには知識、經卷の何物たるかが明に説破され、現代に於て尙ほ哲學の根本問題たる文字的理論的知識的表現が何物であり、従つて言語が何物であり、それが眞理の意味と如何に關係すべきものであるかといふことが、これ以上簡潔明白に説き得られない程に説かれてゐる。ほんとに自分の中に確實な直證として全體的體系的に了解體得されてゐなければ、眞理を決して斯くも簡潔明確に説けるものでない。そこには知識、經と坐禪との關係が全く明確に盡時盡空、三世十方を貫いて盡されてゐる。坐禪の眞理が經の眞理、經中の經の眞理であることがそこに全く明確に道破されてゐる。知識が法となり、眞理となり、經となり、人格となり、師となり、佛となつてゐる。カントもヘーゲルもフツサルも皆その中に生かされてゐる。眞に熟讀するに足る所述である。不滅の大獅子吼である。こゝまで來ると大哲學者と言はれるアリストテレスもベーコンも、カントも、ヘーゲルも、フツサル

も、たいして珍しいものでもなくなつて、そんなに大きくも見えない。それだけの威力を道元は現代哲學的にみても有してゐるのである。解説は省略してをくが、熟讀吟味するに足るところだ。八宗十宗八萬四千の全法門、古今東西の全哲學に亘る佛道の全眞理をこれだけに哲學的に噛みこなして自己のものとなしきつたところが、千古萬古實に不滅である。そこに知識、經の本質が功夫坐禪の眞理に外ならぬことが説き盡されてゐる。アリストテレスを發展さして近世歸納法論理の祖と稱せられるベーコンは決して偉くないことはない。が道元の斯くの如き道破に接しては、愈々その精神的哲學的な行や直證や全體的體驗的なる直觀や形式的基礎的なる純粹理論體系に於て、ベーコンも到底及び難きものであることを自らの著書に於て見ざるを得ないであらう。ベーコンの歸納法的態度も當時の西洋の自然科学勃興の機運の徴表として其の後の歐羅巴の自然科学的文化の基礎動力となり、自然科学的文化を發展せしめ、その方法は科學的方法として精神科學へ迄も影響を強く示してきたのであるが、さうした科學的方法を取り入れた後の精神科學的研究の方向や態度が斯くの如き道元の所述に近きものであり、そこに於て始めて道元の所説が生ける指導的意義を有し得るを見て、まさに人は自らの眼や耳を疑ひ、驚歎せざるを得ないであらう。悟り、大悟は、論理的に言へば、その論理は歸納法の論理に外ならないのであり、精神的には特に然りであるが、自然科学的にみても、以後かゝる論理的態度及び方向を指導し得るに足るものは、まさに禪、正法禪でなければならぬことが了解されなくてはならぬ。それ故に參禪者、身心脱落也、祇管打坐始得、不要燒香禮拜念佛修懺看經、と言ふからとて、それは決してぼかんとして「むなしく坐」することではない。「しかあれば心の打坐あり、身の打坐とおなじからず、身の打坐あり、心の打坐とおなじからず、身心脱落の打坐あり、身心脱落の打坐とおなじからず。既得恁麼ならん、佛祖の行解相應なり。この念想觀を保任すべし、この心意識を參究すべし。」(三昧玉三昧の卷)と言はれ得るのであり、また

「おほよそ看經は、盡佛祖を把拈しあつめて、眼睛として看經するなり。正當恁麼時、たちまちに佛祖、作佛し說法し、說佛し佛作するなり。この看經の時節にあらざれば、佛祖の頂顛面目いまだあらざるなり。」と言ひ得るのである。「兀兀地に思量なからんや。」（坐禪箴の卷）坐禪は、基礎的的基本的全體的形式的全體的形式的絕對的超越的なる典型的に純粹なる理想として完成してゐると言ひ得られるものであるから、その究極の端的として、簡潔明確に表現し、象徴し、徴表され得ること、例へば普勸坐禪儀に於けるが如くであり、そこに普勸、布教、傳道の意義も完うされるのである、もし人一時なりとも、跏趺坐に正身端坐するときは、遍法界みな佛印となり、盡虚空ことごとくさとりとなり、その功德をはかりしりきはめんとすといふとも、あへてほとりを得ることあらじと妄言はれるのであり、また修證一如として、直指の本證なるが故に初心の辨道すなはち本證の全體なりと言はれ得るのであるが、また愈々入れば愈々深くして、三業に佛印を標し、三昧に端坐するといふ如きことが、如何に並々ならぬ苦心精進辨道を要するものであるかといふことを知らねばならぬ。然も華嚴、般若、涅槃、法華等の高大の哲理を一息半歩、喫茶喫飯に迄生かすきつて佛道として無量廣大の慈門をひらいてゐるのが佛教であり、禪である。そこで參禪者、身心脱落也、祇管打坐始得、不_レ要_二燒香禮拜念佛修懺看經_一とあるからとて、佛道たる坐禪の本質が禮拜とも、念佛とも、懺悔とも、知識とも、何の關係もないものであるなど、幼稚な論理を振りまはしたならば、佛道たる坐禪の眞理は天地懸隔して了ふのである。即ちこゝに於て要せず、用せずは、要せず、用せず、であると共に、要す、用す、なのである。坐禪の本質の機要から斯ういふことが言へるのである。合理と非合理、肯定と否定との裂破超越であり、統一綜合であり、圓融脱落である。上來、知識、經に就いて述べしことは、その根本的態度に於てまた同じく、禮拜、念佛、修懺等にあてはまる。そしてその究竟に於て、宗教的に、一たび心の奥底より禮拜し、念佛し、修懺する時、坐禪の功德また圓

成すと廣大攝取不捨の慈門を開いてゐるのである。佛道の因果に依つて輪迴流轉の因果を和げ、圓融せしめ、解脱、脱落、安樂ならしむるのである。上求菩提下化衆生の大悲である。こゝまでくれば全く宗教的行である。さもあらばあれ、道元は佛佛祖祖の行説を以て、參禪は身心脱落なり、只管打坐して始めて得、燒香禮拜念佛修懺看經を要せずと道破するのである。これ佛佛祖祖跏趺坐に正身端坐の功夫辨道の活消息であり、哲學であり、宗教であり、解脱であり、脱落である。祇管打坐の當體は、盡空盡時、三世十方全法界に亘る佛道の總府として、最も純粹なる基本的基礎的全體的形式的絶對的超越的なる真空無染汚の典型的理想の身心的現實的具體的象徴であり、この跏趺坐こそ、これ三昧王三昧であり、これ證入であり、一切の三昧はこの王三昧の眷屬なりとし、坐禪辨道、只管打坐を以て佛道修行の正門となすと言ふのである。而してその端的なる本質に於て坐臥を脱落せよと言ひ、坐脱立亡せよと言ひ豈に坐臥に拘らんやと言ふのである。即ち、佛道、坐禪に於ては、祇管打坐、身心脱落を以てその真空無染汚の真理の端的なる基本的典型的表現象徴とするのであるが、その根本的なる意味たり機機要用たる真理の本質が失はれないならば必ずしも坐禪の坐相坐態に執するに及ばぬ、否執してはならぬ。これ坐禪の真理の本質的意味より然らあらねばならぬとするのである。坐禪に於て脱落また脱落脱落といふのは是を言ふのである。

斯かる坐禪の坐相執坐に關しては、眼藏坐禪箴の卷に道元のこれに對する所説がある。曰く、「又一類の漢あり。坐禪辨道は、これ初心晩學の要機なり、かならずしも佛祖の行履にあらず、行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然なり、ただいまの功夫のみにかかはることなかれ。臨濟の餘流と稱するともがら、おほくこの見解なり、佛法の正命のつたはれることおろそかなるによりて恁麼道するなり。なにかこれ初心、いづれか初心にあらざる、初心いづれのところにかおく。しるべし學道のさだまれる參究には、坐禪辨道するなり。その榜様の宗旨は、作佛をもとめざる行佛あり、

行佛さらに作佛にあらざるがゆゑに、公案現成なり。身佛さらに作佛にあらず、羅籠打破すれば、坐佛さらに作佛をさへず。正當恁麼のとき、千古萬古ともにとより佛にいり魔にいるちからあり。進歩退歩、したしく溝にみち壑にみつ量あるなり。」と。これ羅籠打破し身心脱落せる坐禪の端的に於ては、その坐禪の本質的意味よりしてもとより行住坐臥、進歩退歩すべて脱落され、また脱落脱落されてゐるのであつて、一舉手一投足より出息入息喫茶喫飯に至る迄みな坐禪であり、經行となる。千古萬古ともにとより佛にいり魔にいる力さへある。したしく溝に充ち壑に満つる量がある。豈に行のみならんや、語黙動靜のみならんやと、坐禪の本質よりしてそれを強め深大ならしめて、行坐や語黙や動靜をその本質に於て一如脱落せしめんとしてゐるのである。それと共にまた初心の辨道すなはち本證の全體であるといふ修證一如の趣きを同じことであるが親しく説いてゐるのである。さういふ意味に解すれば行亦禪坐亦禪語黙動靜體安然でよいが、さうでなくして、坐禪辨道は單に初心晩學の要機に過ぎずとなし證上の修としての坐禪を考へず、坐禪の上述の如き本質的意味から離れて行亦禪坐亦禪語黙動靜體安然など、言はんとするならば、それは全く坐禪の何物であるかを知らざるものと言はねばならぬとなすのである。故にこれを打車、打牛、鞭打とみるも、それは決して單なるかきまはしに止るものではなくして、盡界打的、盡心打的なる必然的に本質的なるものに依る陶冶であり、磨して鏡となすである。道元は眼藏で臨濟その人は充分尊敬してゐる。例へば行持の卷。佛佛祖祖を溯源すれば臨濟も道元も菩提達磨に至り、釋迦に至る。その點では所謂禪としての理論に於て臨濟と道元の間に根本的な相異のある筈はないのであるが、前にも少しく言ひたるが如く、道元の禪は、日本人として、印度及び支那傳來の直指單傳の佛法を我がものとし、自己に生かしたのであつて、そこに日本禪として承陽禪としての獨創的意義が存することを看なければならぬのである。その純一無染汚のために禪宗とか何宗など、いふことをも裂破し直に佛道、正法眼

藏に専念するのである。道元は曹洞宗とか、臨濟宗とか、いふさへ反對する(佛道の卷)。純一無染汚の佛道の總府としての禪を日本精神的に全機現的に、日本禪として、正法眼藏佛心印の正法禪として、承陽禪として創立確立したのは正に道元である。その點明に榮西も道隆も祖元も譲らざるを得ない。本質的なる門風であり、家風である。道元が日本人として日本精神的に如何なる人であつたかといふこと、印度及び支那傳來の佛道の總府としての正法禪が如何に日本精神的に道元に於て生かされたかを知らねばならぬ。それは他の機會に於て更に究明さるべきところである。知らるゝが如く、道元の功夫辨道の主要動機は「顯密二教共談、本來本法性、天然自性身、若如_レ此則三世諸佛_レ依_レ甚更發心求_レ菩提_レ耶」にあつた。結論は本來本法性、天然自性身で宜いのである。道本圓通であり、結果自然成である。それを如何にして自己に生かし得るか、如何にそれを悟るか、この現實的に生ける問題が彼の辨道坐禪、佛知の根本出發點であり、そしてそれを彼は竟に遂げたのである。それを自己に於て坐禪の本質に依て成し遂げたのである。清明心である。眞空無染汚である。即心是佛、諸法實相である。虚空である。海印三昧である。山水である。谿聲山色である。光明である。古鏡である。純一である。洗面洗淨である。祇管打坐である。全機現である。拳頭である。道心である。直指單傳、超佛越祖である。感涙であり、天童會つて永平に瞞ぜらるである。道元は釋迦、達磨の弟子であり、釋迦達磨は道元の弟子である。天上天下當處永平である。朝朝日東出、夜夜月沈_レ西、雲收山骨露、雨過四山低、畢竟如何、良久曰、三年逢_レ一閏_レ雞向_レ五更_レ啼、である。祝國開堂であり、興聖、祝聖である。

斯くて、道元は佛道の總府としての坐佛に於ける執坐の問題に就いて、更に坐禪箴の卷に言ふ。「若執_レ坐相、非_レ達_レ其理。いはゆる執坐相とは、坐相を捨し坐相を觸するなり。この道理は、すでに坐佛するには不執坐相なることえざるなり、不執坐相なることえざるがゆゑに、執坐相はたとひ玲瓏なりとも、非達其理なるべし。恁麼の功夫を脱落身

心といふ。いまだかつて坐せざるものにこの道のあるにあらず。打坐時にあり、打坐人にあり、打坐佛にあり、學坐佛にあり。ただ人の坐臥する坐の、この打坐佛なるにあらず。人坐のおのづから坐佛佛坐に相似なりといへども、人作佛あり、作佛人あるがごとし。作佛人ありといへども、一切人は作佛にあらず、ほとけは一切人にあらず、一切佛は一切人のみにあらざるがゆゑに。人かならず佛にあらず、佛かならず人にあらず、坐佛もかくのごとし。坐佛の作物を證する、江西これなり、作佛のために坐佛をしめす、南嶽これなり。南嶽の會に慙麼の功夫あり、藥山の會に向來の道取あり。しるべし、佛佛祖祖の要機とせるは、これ坐佛なりといふことを。すでに佛佛祖祖とあるは、この要機を使用せり。いまだしきは、夢也未見在なるのみなり。おほよそ西天東地に佛法つたはるといふは、かならず坐佛のつたはる(る)なり。それ要機なるによりてなり。佛法つたはれざるには、坐禪つたはれず。嫡嫡相承せるは、この坐禪の宗旨のみなり。この宗旨、いまだ單傳せざるは佛祖にあらざるなり。この一法あきらめざれば、萬法あきらめざるなり、萬行あきらめざるなり。法法あきらめざらんは、明眼といふべからず、得道にあらず、いかでか佛祖の今古ならん。ここをもて佛祖かならず坐禪を單傳すると一定すべし。」そこで坐禪の意味本質に於ける坐相に執するといふこと、坐相を一つの相としてとるといふことは、坐禪の本義たる脱落に従つて、また坐相の脱落であり、坐相の脱落脱落でなければならぬ。坐相に執著したならば、佛道の本質たる真空無染汚、無相、無心の眞理は染汚を受ける。然しそれを正身端坐の身心的具體的象徴に依つて、必然性を以て、象徴するといふのである。だが坐禪の本質、佛教の眞理は何處までも真空無染汚、無相、脱落であり、それが打坐の當相に依つて象徴されるといふのであるから、執著の意味にて坐相に執してはならぬ。真空無染汚、無相、脱落を生かし藏する意味に於て坐相を佛道の基本的象徴としての坐禪と見做すべきであり、真空無染汚、無相、脱落を否定したり汚したりする意味で坐相を有する坐禪を考へて

はならぬと言ふのである。坐相をとつて坐禪するのは、坐相を捨し坐相を觸するのである。坐相を捨て且つ坐相に觸れ坐相をとるのである。此の意味を辨へることなくして、坐相をとり、坐相に執著したならば、たとへその心境にして八面玲瓏、真空無染汚でありとするとも、未だその八面玲瓏、真空無染汚の當體そのものに執著してゐるのであつて、まだ究竟の一著、耶一著に執著してゐる。それでは坐禪に依つて坐禪の眞理たる佛道が生かされてゐない。この那一著をも脱落せよ、フツサールの理解したアリストテレスの *to do to* が見事に爆破されてゐる。脱落をも脱落せよ、我執のみならず法執をも放下せよ、真空無染汚、八面玲瓏、無相脱落といふ究竟の一著をも脱落せよと言ふのである。こゝまで來ると言語や思惟では十分表はし得られぬ。超越と内在の問題である。表現と證との問題である。以心傳心、直下承當、一喝であり、大喝であり、露であり、參であり、皮肉骨髓であり、正法眼藏佛心印である。是の如き功夫を脱落身心と言ふのであり、それが坐禪の本義であると言ふのである。坐禪の形態は、一の身心的具體的形態として、坐禪の眞理たる無染坐真空、無相、脱落の本質を象徴するものであるが、然もそれが坐相といふ一つの相に依て象徴されるより外に不可能であるが故に、不執坐相なることを得ないと言ふのである。そしてこの一つの相としての坐相をも脱落して坐禪の眞の生ける真空無染坐無相脱落といふ眞理に達せよ、脱斷すべし。坐落すべし。それが、その功夫が、脱落身心の本義である。坐禪の本義である。跏趺坐正身の一坐相をとつて坐禪することの中に、その坐禪の本質的眞理として、その坐相をも脱落せしむる義が存するといふのである。それに依つて坐禪の本義が始めて坐禪に依つて象徴され得るものとなると言ふのである。そして斯ういふ問題が斯う言へるのは、いまだかつて坐せざる人、坐禪をしたことのない者にこの道、この道理があるのではない。一つの坐相をとつて、祇管打坐で、坐禪に依つて佛道の本質に辨道工夫する時はじめて斯ういふ問題が生じ、斯ういふ道理が辨道工夫されなければならなく

なるといふのである。それ以下はその説明で人と佛、人坐と佛坐坐佛、に關する形式論理的包攝關係を説けるものである。そこで、「しるべし、佛佛祖祖の要機とせるは、これ坐佛なりといふことを、」と言ふのである。これ坐禪といふこの跏趺坐の正身端坐が、決して單に任意的な身體的形相の一つであるのでなくして、この正身端坐が辨道功夫の正門たるべき必然性がそこに存する佛道修證の根本的形態であり、坐禪の當相が、最も純粹なる基礎的的基本的全體的形式的絶對的超越的な現實的具體的な理想的典型的形態であることが明にされてゐるのである。それは、更に、その坐相と、佛道の本質たる坐禪の根本眞理との間の必然性に就いて言へるものである。それ故に坐禪の仕方などを道元は詳細に説くのである。そして、「おほよそ西天東地に佛法つたはるといふは、かならず坐佛のつたはるるなり。それ要機なるによりてなり。佛法つたはれざるには、坐禪つたはれず。嫡嫡相承せるは、この坐禪の宗旨のみなり。この宗旨いまだ單傳せざるは佛祖にはあらざるなり。この一法あきらめざれば、萬法あきらめざるなり、萬行あきらめざるなり。法法あきらめざらんは明眼といふべからず、得道にあらず、いかでか佛祖の今古ならん。ここをもて佛祖かならずを坐禪單傳すると一定すべし。」と言ひ得るのである。佛法が傳はるといふことは跏趺坐正身端坐のこの坐禪、この坐禪の傳はると言ふことである。これ佛道の根本である。この根本的な一法あきらめられて始めて萬法あきらめられ得ると言ふのである。故に佛道を單傳するといふことは、この佛道の根本たる坐禪を單傳することであると斷言することが出来ると言ふのである。(昭・一四・一一・一)